

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者および非学習者の日本語アクセント知覚 —日本語の学習経験が日本語アクセント知覚に与える影響について—

氏 名

梁 辰

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えるか、与えるとすればどのような影響を与えるかを研究課題として、日本語母語話者、中国語を母語とする上級の日本語学習者、日本語の学習経験がない中国語母語話者を対象に行った3つの実験とその結果をまとめたものである。

論文は、第1章「はじめに」、第2章「日本語のアクセントと中国語の声調」、第3章「言語知覚モデル」、第4章「先行研究」、第5章「研究課題」、第6章「実験1: 両耳分離聴検査法による同定実験」、第7章「刺激連続」、第8章「実験2: 範疇知覚を明らかにするための同定実験」、第9章「実験3: 範疇知覚を明らかにするための弁別実験」、第10章「結論と今後の課題」から成る。

以下、本論文の構成に沿って各章の概要を述べる。

第1章では、中国語母語話者を対象とする日本語教育の現状に基づき、中国語を母語とする日本語学習者を対象とする日本語アクセントの知覚研究を行う必要性について述べた。また、中国語と日本語の方言の中から、本研究が対象とする中国語と中国語母語話者、日本語と日本語母語話者を定義した。

第2章では、日本語のアクセントと中国語の声調について論述し、日本語と中国語は高さで語の意味が弁別される点においては共通しているものの、日本語のアクセントと中国語の声調とは、付与単位、トーン指定の密度 (tonal density)、高さの変動幅、弁別機能の強さ、統語機能の強さに違いが見られることを述べた。また、普通拍からなる2モーラの日本語のLHアクセント(以下、LH)とHLアクセント(以下、HL)をそれぞれ中国語の四声と対応させ、モーラ間の高さ配置から見れば、LHはT3+T1に、HLはT1+T4に近似するが、後者に比べて前者における違いがより大きいことを指摘した。

第3章では、成人の未習得言語または第二言語の知覚に影響を与える要因と、その仕組みを体系的に説明する2つのモデル、知覚同化モデル (Perceptual Assimilation Model, PAM) と、音声学習モデル (Speech Learning Model, SLM) について、それぞれの主張と示唆をまとめて述べた。その上で、両者が競い合う関係ではなく、異なる対象者を標的として、補い合う関係にあることを示した。

第4章では、本研究の先行研究として、まず、これまで欧米で行われてきた声調の知覚研究についてその成果を俯瞰し、PAMとSLMを声調の知覚研究に応用する必要性について述べた。その後、日本で行われてきた日本語アクセントの知覚研究、とりわけ中国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語アクセントの知覚研究について述べた。

第5章では、これまで中国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語アクセントの知覚研究のほとんどは、実験協力者のアクセント型別の正答率について検討したものであったことを踏まえ、本研究は中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に基づく語の同定処理を検討し、日本語の学習経験がこれらの日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えるか、与えらば、どのような影響を与えるかを明らかにすることを研究課題とすることを述べた。

第6章では、中国語を母語とする日本語学習者が聞き取れた高さ情報を用いて意味が異なる語を正しく同定できるか、また日本語の学習経験がこのようなアクセント知覚に基づく語の同定処理に影響を与えるか、与えらばどのような影響を与えるかを明らかにするために、日本語母語話者、中国語を母語とする上級の日本語学習者、日本語の学習経験がない中国語母語話者を対象に行った両耳分離聴検査法による同定実験（実験1）の詳細を述べた。

この実験1では、「垢」、「赤」、「麻」、「朝」を資料語として、akaとasaそれぞれに2つずつの対立ペア（アクセントの異なる2語の組）を用いて実験協力者に聞かせ、「垢」、「赤」、「麻」、「朝」ごとの正答率と反応時間を集計した。その結果、日本語学習者と日本語の学習経験がない中国語母語話者との間では、正答率と反応時間に有意差が検出され、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えることが示唆された。その一方で、日本語学習者と日本語母語話者との間では、正答率にも反応時間にも有意差が検出されず、日本語学習者は日本語の学習を通じて、日本語の概念化された高さ範疇を習得しており、日本語アクセント知覚に基づく語の同定処理が求められる場合、母語の高さ範疇（声調）ではなく、習得した日本語の高さ範疇を用いて語の同定処理を行うことが示された。

第7章では、実験2と実験3に用いる刺激連続の詳細について、まず、範疇知覚を明らかにするための同定実験と弁別実験を実施する際に生じる「端点の正規化問題」について述べた後、この問題を解決するために、本研究が策定した端点の選定方法、および端点に対する正規化修正の方法について述べた。次に、正規化修正を経た端点のピッチ曲線に基づいて作成した2つ刺激連続（akaの刺激連続とasaの刺激連続）の音響的性質とそれに対する自然度評価試験の結果について述べた。

第8章では、日本語学習者が習得した日本語の高さ範疇は、日本語母語話者が母語として獲得しているものと同一であるかどうかが、さらに、日本語の学習経験が日本語アクセントの知覚様式にどのような影響を与えるかを明らかにするために、実験1と同じ実験協力者を対象として行った範疇知覚を明らかにするための同定実験（実験2）の詳細を述べた。

この実験2では、第7章で作成した2つの刺激連続上にあるそれぞれ10個の刺激語を無作為に配列し、実験協力者に各刺激語を合計4回聞かせ、実験協力者群別の音韻境界値と、個々の刺激語がLH（「垢」、「麻」）またはHL（「赤」、「朝」）に同定される割合を明らかにした。その結果、日本語学習者は日本語非学習者と日本語母語話者に比べて、音韻境界値がHL側に偏ることが示唆された。

このことから、日本語学習者が習得した日本語の高さ範疇は、日本語母語話者が母語として獲得している高さ範疇に比べ、LH についてはモーラ間のピッチの変動域がより小さい値まで容認される一方、HL については第 2 モーラのピッチ下降により大きな傾斜が必要であることが明らかになった。さらに、音声学習モデル (SLM) によると、このことは、LH は日本語の学習によって新たに構築された高さ範疇であり、母語の T3+T1 と異化されるのに対して、HL は母語の T1+T4 と同化され、合併された高さ範疇であることに起因するという仮説を提示した。

第 9 章では、実験 2 に見られた日本語母語話者、日本語学習者、日本語の学習経験がない中国語母語話者における違いが、範疇知覚を明らかにするための弁別実験にも反映されるか、反映されるとすれば、それはどのような違いかを明らかにするために、実験 1 と実験 2 と同じ実験協力者を対象に行った実験 3 の詳細を述べた。

この実験 3 では、第 7 章で詳しく述べた 2 つの刺激連続上にある刺激語を 1 つおきに組み合わせた弁別ペアを実験協力者に聞かせ、実験協力者群ごとの各弁別ペアにおける弁別正答率を集計した。その後、実験 2 で得られた実験協力者群ごとの各刺激語の同定状況と比較し、その結果、日本語学習者の音韻空間においては、LH と HL が対等の 2 つの高さ範疇として存在しており、日本語母語話者のアクセント核の探索に重点を置く知覚様式とは異なることが示された。

第 10 章では、本研究の結論と今後の課題について述べた。結論部分を以下に要約する。

本研究は、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えるか、与えるとすればどのような影響を与えるかを研究課題として 3 つの実験を行った。これらの実験の結果、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えることが明らかになった。また、日本語の学習経験が日本語学習者の日本語アクセント知覚にどのような影響を与えるかについては、大きく分けて次の 2 つの知見が得られた。

1. 日本語学習者は、日本語の学習を通じて、日本語の概念化された高さ範疇を習得している。日本語アクセント知覚に基づく語の同定処理が求められる場合、母語の高さ範疇 (声調) ではなく、習得した日本語の高さ範疇を用いて語の同定処理を行い、同定処理が日本語非学習者に比べ、より日本語母語話者に近い、安定したものとなっている。

2. 日本語学習者の音韻空間においては、LH と HL が対等の 2 つの高さ範疇として存在しており、日本語母語話者のアクセント核の探索に重点を置く知覚様式とは異なる。また、LH は日本語の学習によって新たに構築された高さ範疇であるのに対して、HL は日本語学習者の母語にある T1+T4 と合併された高さ範疇である。さらに、LH は母語の T3+T1 と異化されるのに対して、HL は母語の T1+T4 と同化される結果、日本語学習者が習得した日本語の高さ範疇は、日本語母語話者が母語として獲得しているものに比べて、LH についてはモーラ間のピッチの変動域がより小さい値まで容認される一方、HL については第 2 モーラのピッチ下降により大きな傾斜が必要である。

最後に、音声学習モデル (SLM) によって示唆された日本語学習者の音韻空間における高さ範疇間の異化と同化が実際にどのように発達してきたか、また、本研究によって明らかになった日本語学習者の知覚様式が、生成面に反映されるか、反映されるとすれば、知覚と生成がどのように関係しているかなどを今後の課題として挙げた。